

■ 書 評



精神科リハビリテーション：
スキルアップのための11講
一見慣れているやり方を手
放すと見えてくるものがある：
るえか式デイケア・リ
ハビリテーション

肥田裕久 著
星和書店

2018年10月 312頁
本体価格 3,500円＋税

実践の知恵がたくさんつまった本である。デイケアや地域での診療に関心がある人にとっては、新しいアイデアがたくさん得られると思うので、一読をお勧めしたい。

著者は、首都圏のベッドタウンにデイケアを中核とするクリニックを構えており、地域生活を支援するために、ほかにも就労継続支援・移行支援事業所、生活介護支援事業所、グループホームなどを持っており、これらの運営は当事者がたくさん働く株式会社MARSによって運営されている。これらの活動はたえず新しいプログラムやアイデアによって更新されており、若い元気な当事者がたくさん参加している。ともかく当事者や家族に人気のあるクリニックである。スタッフも、通常の医療従事者のほかに、ピアスタッフが多いことが特徴で、さらにもと製薬会社の社員さんやら、もと学校の先生やら、医療関係のイベント会社の社員さんやらもいつの間にかスタッフになっていたりする。創造性と活気が人を引きつけるのだと思う。

この本では、その人気と活気のコツが明らかにされる。全部で11講からなっているが、共通の精神は「世間のさまざまな知恵を取り入れて、おもてなし精神いっぱい楽しいプログラム・場所を作ること」であり、それが参加する患者さんが元気になる秘訣なのだろう。どの講でも、まず著者が心を引かれる言葉や考え方が紹介される。生物学であったり、哲学者の言説であったり、精神病理学者であったり、いわゆる雑学の知識であったり、幅広い世界から取り出されてきた言葉である。そこから著者の見解を引き出して、ふだんの臨床を再考したり、再構築する手がかりとして使

い、最後は著者が実践で行っている工夫に結びついていく。読み物としても面白い展開である。たとえばシェイクスピア「ベニスの商人」の裁判官の台詞をまず提示し、古いいろいろなやり方を変えることがむずかしいことを持ち出し、リハビリテーションの十年一日のやり方から解き放つ必要を説き、著者の行っているリハビリテーションでめざしているさまざまな工夫の話になる。その中に遊園型デイケアと原っぱ型デイケア、バザールのような活気のある雑踏のような場所としてのデイケアなど、面白い造語がたくさん出てくる。

著者の話を聞いて、家族心理教育の専門家であり優れた実践家である後藤雅博氏は、「今日は、るえか式（ひだクリニックで行っているやり方がこう呼ばれている）心理教育の話をしてもらったけれど、どこにも定義なんかなかったですよ。でも今日の話には「あるもの」がありました。愛の反対語はわかりますか？」とコメントした。ナチスのアウシュビッツ収容所を生き延びた人が、「愛の反対語は、憎しみではない、無関心だ」と述べたという話に続く。定義はないけれど、知恵と関心と愛情がたくさんある、そういうコメントである。このコメントは本書の特徴をよく表していると思う。たとえば、著者のクリニックではカップルがたくさん生まれるが、恋愛宣言、別離宣言なども公開されて、皆が見守る。デイケアではカップルの結婚式までやる。フットサルのチームでは厳しいポジション争いもある。ふつうの社会でやられていることをなるべく取り入れたいという考え方なのである。

著者のクリニックは繁盛しているし、スタッフも多様で活気がよい。本書の最後の部分には、「ロマンと算盤」の話が出てくる。あふれるような愛情と関心とおもてなしの心を持っている著者は、同時に優れた経営者でもある。どのようにして、経済的な面ばかりではなく、人の活用や組織の維持・発展を行っているのか、ふつうの社会にある厳しいあつれきやいじめを緩和しつつ自由な交流や競争を可能にしているのか、「算盤」の部分ももっと書いて頂けたら、多くの読者にとって大いに参考になったのではないかと思います。

(池淵恵美)